HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ドゥンシャン語の動詞形態法に見られる中国語の干渉 : 接尾辞型から孤立語型へ |
| Author(s) | 一ノ瀬, 恵 |
| Citation | 北海道大學文學部紀要, 42(2), 171-204 |
| Issue Date | 1994-01-27 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/33621 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 42(2)_PL171-204.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 42-2 (1994)

# ドゥンシャン語の動詞形態法に見られる中国語の干渉

## ―― 接尾辞型から孤立語型へ ――

一ノ瀬　恵

目　次

1．はじめに …… 171
2．ドゥンシャン族の言語使用状況 …… 173
3．ドゥンシャン語に見られる中国語の干渉 …… 178
　1．音韻 …… 180
　2．形態 …… 181
　3．統語 …… 184
　4．語彙 …… 184
4．動詞語幹による副動詞形成 …… 187
　1．中世蒙古語 …… 188
　2．現代モンゴル語 …… 190
　3．ドゥンシャン語 …… 191
　4．中国語との対照 …… 195
5．おわりに …… 198
　註 …… 199
　参考文献 …… 202

## 1．はじめに

中国青海省および甘粛省では，モンゴル語学で通常「孤立的」とよばれる一群のモンゴル系諸言語がおこなわれている。具体的には，シラ・ユグル（東部裕固）語，モングォル（土族）語，バオアン（保安）語，ドゥンシャン（東郷）語の4言語である。これらの言語を「孤立的」というのは，中国語のように語の形態的変化の少ない言語を類型論的観点から「孤立語」とよぶのと

は異なり，地理的に孤立していること，また，一方では他には見られない古い言語特徴を保持しながら(1)，もう一方では隣接するチュルク系の言語，チベット語，中国語などとの接触によって，音，形態，統語，語彙の各レベルにわたり多大な変化をこうむった結果，全体として，他のモンゴル系諸言語とはいちじるしく異なる外観を呈するにいたったことによる。

栗林は，これら「孤立的」諸言語に共通して見られるきわだった音声的特徴として，1）語の強勢が語末音節の母音におかれる（4言語に共通），2）語頭に子音連続あるいは子音rが現われる（4言語に共通），3）母音調和が破壊され，語幹内にわずかに痕跡として認められるのみとなっている（シラ・ユグル語以外の3言語に共通），4）前舌の円唇母音をもたず，母音体系が単純化している（シラ・ユグル語以外の3言語に共通），5）短母音と長母音の対立がない（ドゥンシャン語，モングォル語民和方言，バオアン語大河家方言に共通）の5点をあげ，このうち特に，2），3）の特徴は，語頭には子音連続や子音rが立たず，母音調和を有するといわれているアルタイ諸言語に共通の基本的特徴における変容であり，これらの言語がこうむった変化の深刻さがうかがわれることを指摘している（1989a：278－9）。

もちろん，アルタイ諸言語に共通する諸特徴において，これら4言語がこうむった変容は音声面だけに限られるものではない。例えば，形態法におけるアルタイ諸言語に共通の主要な特徴としては，主に接尾辞を語幹に次々に接続させることによって語形成を行なう，いわゆる「接尾辞型」を示すことがあげられるが，これら4言語のなかでも，中国語の干渉をとりわけ深刻に受けたと思われるドゥンシャン語に広範に見られる，動詞語幹によって副動詞形を表わす現象は，語の形態的変化が少ないといわれる「孤立語型」の特徴を有する中国語の影響によって，ドゥンシャン語の動詞形態法に接尾辞型の崩れが引き起こされたことによるものと考えることができるであろう。このような変化は，ドゥンシャン語の動詞形態法における主要な構造的変化のひとつとしてとらえることができるものであり，ここに中国語からの干渉の深刻さを認めないわけにはいかない。

筆者はこの点に関して，すでに別の論稿で指摘しておいたが（一ノ瀬

1992：86)，本稿ではこれを特に取り上げて扱うものとする。その手続きとして，まず第2節で，このような形態的変化を引き起こす背景となった，ドゥンシャン族におけるドゥンシャン語と中国語の使用状況を，甘粛省編輯組編（1987：122－4）の調査資料にもとづいて踏まえる。次に第3節では，ドゥンシャン語が中国語からの干渉をどの程度受けているのかを全体的に把握するために，音韻，形態，統語，語彙の各レベルにみられる干渉の事例を概観する。そして第4節では，本稿の主たるテーマであるドゥンシャン語における動詞語幹による副動詞形成の諸例を分析することによって，それが，中世蒙古語にかつて存在し，また現代モンゴル語（ハルハ Khalkha 方言，チャハル Chakhar 方言等）においても存在する限られた範囲での類似の用法が，中国語の影響によって，ドゥンシャン語において拡大発展した，いわば「触発 triggering」の原理（細川　1985：78）にもとづく変化であることを明らかにしたい。

## 2．ドゥンシャン族の言語使用状況

ドゥンシャン語は中国甘粛省臨夏回族自治州を中心に，臨夏市，臨夏県，寧定県（現在の広河県），和政県，康楽県，蘭州市，さらには新疆省，寧夏省，青海省などに居住するドゥンシャン族によって話されるモンゴル語系の言語である。ドゥンシャン族の人口は，『中国一九八二年人口普査資料』（1985，北京）によれば，1982年現在で27万9523人である。民族および言語名として知られる自称「ドゥンシャン（東郷）」は，かつての行政区画で「(河州の）東の郷」をさす中国語に由来するという（この他，かつて自称として報告された「サンタ Santa」［ドゥンシャン語で「イスラム教徒」の意］との関係については，栗林編［1986： v-vii］を参照されたい)。また，彼らはイスラム（回）教徒であることから，ドゥンシャンホイホイ（東廂回回），モングホイホイ（蒙古回回）などとよばれていたこともある。

ドゥンシャン族の由来については，彼らが独自の文字を持たず，辺境の地に居住しており，また1949年新中国成立以前には独立の民族として認められていなかったことも原因して，これまでのところ十分に明らかにされていな

い。《東郷族自治県概況》編写組編によれば，従来は，主にモンゴル族説，回族・モンゴル族・漢族・チベット族混合説がおこなわれていたが，近年はむしろ回族説が主流になっている（1986：16－8）。

混合説の根拠としては，チンギス汗が西征からの帰途，西夏に侵攻した際に，モンゴル軍とそれに編入された回族が初めて現在のドゥンシャン地域に来たのが，ドゥンシャン族の始まりであるとする推測があげられる。一方，漢族はモンゴル軍に参加して来てドゥンシャン族の形成に関与したか，あるいはドゥンシャン族の中には自分たちの祖先は陝西などの地からやってきた難民であるというものもあることから，ドゥンシャン族の形成過程以後に融合したものともみられる。次に，回族説の根拠としては，ドゥンシャン族のイスラム教徒を意味する「サンタ」という自称，あるいは，ドゥンシャン地域において中央アジアの地名や突厥人の「ナイマン」部に類似した地名，モンゴル軍が中央アジアから連れてきたと思われるさまざまな職人を意味する地名が存在すること，さらにはドゥンシャン族が中央アジア系の容貌をもつことなどがあげられる。

一方，栗林は，ドゥンシャン語をふくむ上述の孤立的モンゴル系諸言語の語の強勢が，通常，第1音節に強勢をもつ他のモンゴル系諸言語とは異なり，一様に語末音節の母音におかれることに注目して，これが同様の強勢をもつチュルク系の言語の基層（substratum）によるものではないかと推測している（1989 a：279－80）。すなわち栗林によれば，チュルク系の言語を話すチュルク系の民族が，モンゴル語へと言語の取り替えをおこなった結果生まれたのが，これら4つの孤立的言語であるというわけである。これは言語学的見地からドゥンシャン族の由来に関する問題にアプローチした説として注目に値いする。

ところで，このように，ドゥンシャン語の形成に際し，過去のある時点でチュルク系の言語がその基層として関与していたかどうかという議論はここではさておき，現在のドゥンシャン語にみられる他言語からの干渉を論じる際には，むしろ中国語（西北方言）を抜きにすることはできない。ちなみに，ドゥンシャン族の大部分が中国語との2言語併用者であるという（栗林

1989 b：1281)。しかし，ここでいう「大部分」というのが具体的にはどの程度のものであり，また「2言語併用」というのが，一人一人の個人が2つの言語を同じくらい流暢に運用する能力のある状態（個人的2言語使用 individual bilingualism）をさしているのか，それとも，ある地域社会の成員の多くが2つの言語のいずれをも，その使用能力や表現範囲の程度差はともかくも，生活言語として使用している状態（集団的2言語使用 community bilingualism）をさしているのかについては明らかではない(2)。

筆者自身ドゥンシャン族地域で現地調査を行なったことがないため，以下では，甘粛省編輯組編(1987：122－4)に記載されている1958年のドゥンシャン族社会歴史調査報告にもとづき，これらの点を概観することによって，この「中国語との2言語併用」状況に関して若干の補足を加えておくことにしたい。甘粛省編輯組編（同上）は，資料的な古さや実施方法の不徹底のため，その統計に絶対的な信頼をおくことができないことは否めないが，ドゥンシャン族の言語使用状況を知るひとつの手がかりとしては有効であろう。

甘粛省編輯組編（同上）では，ドゥンシャン族が集中的に居住する臨夏回族自治州ドゥンシャン族自治県における中国語の使用状況を，その普及率および地域的まとまりを考慮して，大きく次の3つの地域に分類している（表1参照)。

**〈表1〉 ドゥンシャン族自治県における中国語の普及状況**

| 地　域 | 人　　口 | 中国語能力者 |
|---|---|---|
| 1* | 63,024 | 8,193 |
| 2** | 13,511 | 4,459 |
| 3*** | 37,885 | 35,233 |
| 合　計 | 114,420****(3)<br>(100%) | 47,885<br>(43%) |

（甘粛省編輯組編の資料にもとづき一ノ瀬が作成）

*　汪集区，四甲区，高門郷，免谷池郷，大樹郷，羅穆区，平善区

**　鎖南鎮，春台郷，坪庄郷

***　百和郷，唐汪区，大板郷，科妥郷，薫嶺郷，紅塔郷黄家村，紅崖郷，河灘区，関堡郷，羅穆区，平善区

****　ただし，うち15,692人は回族および漢族

この表でいう「中国語能力者」（原文では「会漢語者」）には，聞き取りも会話も自由にできる者（原文では「全通漢語者」）のみならず，聞き取りはできるが，あまり話すことのできない者（原文では「半通漢語者」）も含まれていることに注意されたい。すなわちこの資料では，「全通漢語者」「半通漢語者」といった場合に初めて，ある個人における２つの言語の運用能力の程度という側面に着目していることが知られる。以下では便宜的に前者を中国語の「完全能力者」，後者を「不完全能力者」と呼ぶことにし，上述のごとく２様に定義されうる「２言語併用」あるいは「２言語併用者」といった用語は，ここでは混乱を避けるために用いない。

まず，地域１では，全人口の13％が中国語の能力を有するのみである。例えば，汪家集区砂黒池社では，全人口279人のうち中国語の完全能力者は９人で，全体のわずか3.2％，不完全能力者は27人で，全体の9.9％をそれぞれ占めるにすぎない。また，これらの中国語能力者も日常生活においてはすべてドゥンシャン語を使用し，ドゥンシャン語のできない者に対してのみ中国語を使用するという。このことからも，この地域では，ドゥンシャン語が中国語に対してかなりの優勢を占めていることがうかがわれる。

次に，地域２では，全人口の33％が中国語の能力を有することになり，地域１よりも高い率を示している。しかしながら，実際の内訳はいささか複雑のようである。例えば，鎖南鎮鎖南社の王家村を例にとると，ここはドゥンシャン族と漢族の雑居地区であり，全人口108人のうち，38人の漢族を含んでいる。この村では一般に，ドゥンシャン語と中国語が併用され，中国語の完全能力者は70人で全人口の64.8％，不完全能力者は31人で全人口の28.7％，合計で中国語能力者は全人口の93.5％になり，非常に高い率を示していることがわかる。ところが一方，同じく鎖南鎮の木也里社は純粋にドゥンシャン族のみの居住地区であり，全人口493人のうち，中国語の完全能力者は42人で8.5％，不完全能力者は53人で10.7％，合計で中国語能力者は全人口の19.3％と少ない。このような同じ地域内で見られる不均衡は，中国語の普及率と地域的まとまりの両方を考慮に入れて区分しようとしたために生じたものであり，普及率のみを基準にしたのならば避けられたであろう。さらに，

同じく鎖南鎮におけるドゥンシャン語と中国語の使用状況を職業別に見ると，概して農業などを営む一般住民はドゥンシャン語を話し，管理職員とその家族は中国語を話す傾向があるという。

最後に，地域3では，全人口の93％が中国語の能力を有し，3地域のなかで最も高い率を示している。例えば，百和郷陳家村には，ドゥンシャン族113人，回族4人が居住しており，漢族の居住は報告されていないが，それでもこのうち中国語能力者は102人で，全体の93％という高い率を示している。ただし，ここでも住民は日常生活ではすべてドゥンシャン語を用い，ドゥンシャン語ができない者に対してのみ中国語を用いるという。

以上の資料から見ると，少なくとも1958年の時点では，ドゥンシャン語と中国語の使用状況は地域によってかなりの違いがあり，一個人の運用能力という点からみても，集団の生活言語という点からみても，2言語併用は地域によってはそれほど高いものではないということができる。したがって，もちろん，その後30年以上を経た現在では，中国語の使用率がさらに高くなっていることは十分に予想されることではあるが，もしも上の1958年当時の状況から，現在の状況をある程度うかがうことが許されるとするならば，そこには大部分がドゥンシャン語と中国語の2言語併用者であると均しきってはしまえない複雑な現実があるように思われる。

また，上の資料からうかがえる興味深い点のひとつとして，純粋なドゥンシャン族の居住地区であり，なおかつドゥンシャン語の使用率が高い地区（例えば鎖南鎮木也里社）と，一方，同様にドゥンシャン族が大多数を占めているにもかかわらず，逆に中国語能力者が高い率を示している地区（例えば百和郷陳家村）がともに存在することがあげられる。これが一体なにに原因するのかは，実地調査等によって明らかにする必要がある。いずれにせよ，このような事実ひとつとってみても，ドゥンシャン語と中国語の使用状況は地域によりかなり複雑な様相を呈しており，今後きめ細かなアプローチが必要とされるところであろう。

ちなみに，本稿で筆者が依拠するドゥンシャン語の資料は，主に布和編著（1985），布和等編（1983，1986）であるが，そこでは鎖南坝公社（＝鎖南

鎮区）を主調査地，竜泉公社（＝四甲区）を副調査地としており，上の地域1，2に属するドゥンシャン族のドゥンシャン語資料であることがうかがわれる。

ところで，ドゥンシャン族自治県のドゥンシャン族が中国語を使用するようになったのは，それほど古いことではない。1920年以前に中国語が話せるドゥンシャン族はまだ非常に少なかったが，その後，自治県外に出て商売や仕事をしたり，軍役についたりする者が増えたこと，また，特に1949年の解放以後は交通の便もよくなり，外来の漢族の管理職員，あるいは復員軍人など中国語のできる者がこの地域に数多く居住するようになったこと，さらには学校や訓練班が開設され中国語教育が行われるようになったことなどにより，中国語が急速にこの地域に浸透し，ドゥンシャン族社会において威信言語としての地位を獲得していった。しかしその一方では，この地域にはもともと少なからぬ数の漢族が居住しており，その多くは別の土地に移住したが，現在でも鎖南，東原，関堡，百和，大板空，唐汪などの各地区にはその残留者がいて，中国語を話しているといわれている。これらの漢族と接触のあるドゥンシャン族における中国語とドゥンシャン語の言語使用状況については，別に注目してみる必要があろう。

## 3．ドゥンシャン語に見られる中国語の干渉

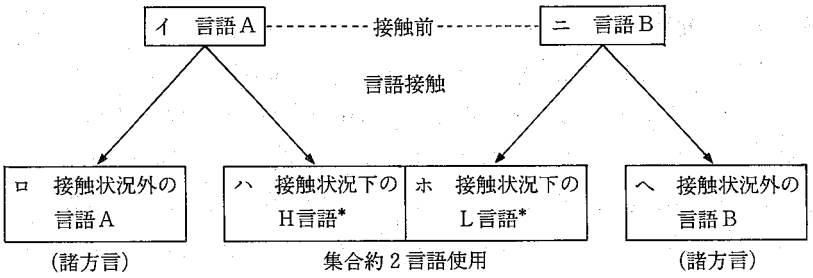
第2節では，ドゥンシャン族におけるドゥンシャン語と中国語の使用状況が，少なくとも1958年の時点で，地域によってはその大部分が2言語使用者であるというほど高いものではないことが明らかになった。とはいえ，ドゥンシャン語の音韻，形態，統語，語彙の各レベルにわたって見られる中国語の干渉の大きさは否定することができないものである。

もっとも，言語は接触のいかんにかかわらず，常に変化しているものであるため，ある言語特徴が他言語との接触によって引き起こされたものであるか否かを決定することはそれほど容易なことではない。ここではこの点を克服するために，細川の「接触する両言語の構造の通時的・共時的な変異を接触状況以外で観察されるものをも含めて，ひろく比較対照していく」という

立場（1985：73）をとる。

具体的に，細川は2言語の接触の構図を次の図1のようにとらえている。

《図1》 言語接触の構図（細川1985:74）




* 社会的地位の高い言語

**社会的地位の低い言語

細川はH言語ハにおいて観察されるある特徴がⅰ）接触言語ホかつ／またはヘの構造上の特徴と相似していること，ⅱ）イ→ロまたはホという通時的な発展において観察されないこと，ⅲ）ロの諸方言間の共時的な変異において観察されないことという3つの条件をすべて満たしていれば，その言語特徴はL言語ホからの干渉によって生じた可能性があるといえるとしている。細川が具体的に論じているのは，南米の中央アンデス地域におけるスペイン語とケチュア語の言語接触による，スペイン語側の「共鳴効果 resonance」[(4)]についてであり，H言語とはスペイン語，L言語とはケチュア語をさす。しかし，反対にL言語であるケチュア語に見られる共鳴効果についても，同様の方法で検証することが可能であると思われるため，本稿で扱うドゥンシャン族におけるL言語であるドゥンシャン語についてもこの方法は適応できるであろう。したがって，以下で筆者があげるドゥンシャン語における中国語の干渉によると思われる言語特徴も，ⅰ）中国語の構造上の特徴との相似が見られる，ⅱ）モンゴル語の通時的な発展において観察されない，ⅲ）モンゴル語の他の方言において共時的に観察されないという3条件を満たすものであり，また，本稿の主たるテーマであるドゥンシャン語の動詞語幹による

副動詞の形成における中国語の干渉についても，これらの条件を満たしているか否かを検討していくことがその主な手続きとなる。以下では以上の点について，音に関しては栗林（1989 a，b）を一部踏まえつつ，各レベル別に，主に布和編著（1985）の資料に分析を加えることによってみていく。

### 3．1．音韻(5)

ドゥンシャン語に独自の音韻的特徴については栗林（1989 a：280－3，b：1281－3）が指摘し，そのいくつかは中国語の影響によるものであると位置づけている。ここでは概観の意味でそれらをも含めて簡略に紹介し，若干補足が必要と思われる部分は，そのつど，特に断わらないかぎり布和編著（1985）による例とともに示す。ただし，その他の具体例については栗林を参照されたい。

#### 3．1．1．音素の取り替え

蒙古文語のǰ，č，s(i)に対して，捲舌音のdz，tʂ，ʂが対応する。

#### 3．1．2．音素の増加

捲舌母音のəは主に中国語の借用語に現われる。ただし，固有語においてもわずかではあるが見られる。

(1) tʂinaə「あさって」，tɕiəgə「木車」[鎖南坝方言]
fugə「牛」[汪家集方言]

#### 3．1．3．音節構造の改変

音節構造がいちじるしく単純化し，閉音節の音節末にたつ子音は，nかŋに限られる。ちなみに，中国語の主たる音節構造は，閉音節では(C)Vnおよび(C)Vŋであるが，これは，満州語の単語の末尾に許される子音がやはりnかŋのみであったことの影響であると考えられている（橋本　1989：897）。

#### 3．1．4．アクセントの改変

中国語からの若干の借用語においては，声調の違いが強勢の位置の違いとして実現され，意味の弁別を行なうことがある。

(2) 'idzi「石鹸」＜yízi胰子　　i 'dzi「椅子」＜yǐzi椅子
'badzi「取っ手」＜bàzi把子　　ba 'dzi「傷あと」＜bāzi疤子

## 3．2．形態

### 3．2．1．後置成分の借用

［a］重複により「～ずつ」の意味を表わす，基数詞および数詞と数量詞[6]の末尾に，副詞句を形成する中国語の接尾辞 -de（地）に由来する -dʐi が付加される。以下，参照する内モンゴル語の標準語の基礎となったチャハル方言は Cha.，中国語（北京語）は Chi. と省略する。

(3) Guraŋ Guraŋdʐi「3つずつ」：Guraŋ「3」

tawi dʐaŋ tawi dʐaŋdʐi「5枚ずつ」：tawi「5」，dʐaŋ「枚」（< zhang 張［数量詞］）

［Cha.］gurab gurab「3つずつ」：gurab「3」

［Chi.］三個三個地「同上」

［b］擬声副詞には，同じく中国語の接尾辞 -de（地）に由来する -dʐi が付加される。

(4) toŋGori gərəu gərəudʐi misidʐi nanbaŋgiədə dawawo「大雁がガーガーと鳴いて南方に飛んでいった」：toŋGori「大雁」，gərəu 擬声語，misi「飛ぶ」，-dʐi 副動詞，nanbaŋgiə「南方」，-də与格，dawa「越える」，-wo 過去

［Cha.］galuu gaŋgar goŋgor doŋgodsoŋ「雁がガンガル，ゴンゴルと鳴いた」：galuu「雁」，gaŋgar goŋgor 擬声語，doŋgod「鳴く」，-soŋ完了

［Chi.］大雁関関嗄嗄地叫着往南飛過去了「(4)に同じ」

［c］後項の語頭子音の交替（mとの交替，語頭のmのsへの交替）を伴う，包括性を表わす重複形形成に際して，重複語幹末に，並列した語句の後に用い「～といった類」という意味を表わす中国語の接尾辞 -de（的）に由来する -dʐi が付加される。

(5) taʂi maʂidʐi「石やらなにやら」：taʂi「石」

maʁala saʁaladʐi「帽子やらなにやら」：maʁala「帽子」

［Cha.］malgææ salgææ「帽子やらなにやら」：malgææ「帽子」

［Chi.］破銅爛鉄的，他撿来一満筐「銅のかけらやら屑鉄やらを，彼は

かごいっぱいに拾ってきた」

［d］持続態を表わす中国語の接尾辞 -zhe（着）に由来する -dʐi が，ドゥンシャン語の副動詞形成接尾辞 -dʐi と融合し，動作の結果，動作あるいは状態の持続を表わす。

(6) ənə mori xoludʐi Guduŋno wo「この馬は走ると速い」（動作の結果）：
ənə「この」，mori「馬」，xolu「走る」，Guduŋno「速い」，wo 繋辞
［Cha.］ənə mœr güixed xurdaŋ bææn「同上」：ənə「この」，mœr「馬」，güi「走る」，-x 形動詞（現在），-ə- 挿入母音，-d 与格，xurdaŋ「速い」，bææ「である」，-n 現在
［Chi.］説着容易，做着難「言うと易しい，やると難しい」

(7) mini nuruŋ otudʐi「私の腰がずっと痛い」（動作の持続）：mini 1人称単数属格（以下，1単属），nuruŋ「腰」，otu「痛む」
この例では -dʐi が終止形として用いられていることに注意。
［Cha.］minii nuruu öbdödʒ bææn「同上」：minii「私の」，nuruu「腰」，öbd「痛む」，-ö- 挿入母音，-dʒ副動詞
［Chi.］我的腰痛着「同上」

［e］中国語の名詞 bao（包）「入れ物，包み」に由来する派生接尾辞 -bo/-bao が，名詞あるいは形容詞の語幹について，「～の人」という意味を表わす（阿・伊布拉黒麦 1988：141）。

(8) qawabo「鼻たらし」：qawa「鼻水」
taʁunbo「太っちょ」：taʁun「太った」
jarabao「傷だらけの人」：jara「傷」

3．2．2．重複法の機能の変化

形容詞の重複形が強程度を表わす。

(9) mila mila「とても小さな」：mila「小さな」
taʁuŋ taʁuŋ「まるまる太った」：taʁuŋ「太った」
［Cha.］büdüüŋ büdüüŋ mod「高い木々」（分布的複数）
［Chi.］小小的「とても小さい」
胖胖的「まるまる太った」

3．2．3．借用動詞による態の表示

受動態を形成する接尾辞が失われ(7)，代わりに名詞と中国語の動詞 ai（挨）「～を受ける，～される」に由来する naiji を組み合わせて受動態を表わす。

(10) bi kuŋsə təija naijiwo「私は人に打たれた」：bi 1単主，kuŋ「人」，-sə奪格，təija「棍棒」

[Cha.] bii xüŋd dʒodogdloo「同上」：bii 1単主，xüŋ「人」，-d与格，dʒod「打つ」，-o-挿入母音，-gd受動態，-loo過去

[Chi.] 挨打 aida「殴られる」

挨罵 aima「罵られる」

3．2．4．繋辞借用による二重繋辞構造

中国語の繋辞 shi（是）に由来するʂi を等位にある名詞間に，一方，ドゥンシャン語本来の繋辞 wo を文末に用いる二重繋辞構造がみられる。

(11) mini niərə ʂi abudu wo「私の名前はアブドです」：niərə「名前」

[Cha.] minii nər baatar「私の名前はバータルです」：nər「名前」

[Chi.] 我的名字是金明「私の名前は金明です」

3．2．5．動詞語幹による副動詞形成

動詞語幹がそのままで副動詞として用いられ，ときにはそれが2つ，3つと重なることがある。以下，下線部が動詞語幹形である。

(12) niə boro imaŋ ətʂisə idundənə idʐie agiwo「1匹の灰色のヤギが行くと，たちまちのうちに食べてしまった」：niə「1」，boro「灰色の」，imaŋ「ヤギ」，ətʂi「行く」，-sə副動詞（仮定），idundənə「たちまちのうちに」，idʐiə「食べる」，agi「取る」（動作の完了を示す補助動詞）

[Cha.] tʃon xurgiig bærsaŋ tər dooroon idədʒ œrxloo「オオカミは仔ヒツジを捕まえるとすぐに食べてしまった」：tʃon「オオカミ」，xurg「仔ヒツジ」，-iig対格，bær「捕まえる」，-saŋ完了，tər「その」，dooroŋ「すぐに」，idə「食べる」，œrx「捨てる」（動作の完了を表わす補助動詞），-loo過去

[Chi.] 一只灰山羊去了之后，一頓就吃掉了「(12)に同じ」

(13) dʐinda dʐiauli bosi irəsə ja ənə ʂi niə dʐaudʐiŋ wo「慌てて跳び起き

てくると，これはひとつの夢なのだ」（布和　1986：279）：dʐinda「慌てる」（＜jin 緊），dʐiauli「跳ぶ」，bosi「起きる」，irə「来る」，ja 終助詞（強調），dʐaudʐiŋ「夢」

［Cha.］tər dʒotʃiŋ sərtʃ üsrəŋ bostʃ irləə「彼は驚いて目を覚まし跳び起きてきた」：tər「彼」，dʒotʃ「驚く」，-i- 挿入母音，-ŋ副動詞，sər「目覚める」，üsr「飛び上がる」，-ə- 挿入母音，bos「起きる」，ir「来る」，-ləə過去

［Chi.］他看見這個人赶忙站起来「彼が見ると，この人は大急ぎで跳び起きてきた」

### 3．3．統語

引用節＋「～と思う」「～と希望する」等というモンゴル語の語順が，「思う」「希望する」＋引用節のように逆転する。

(14) bi pandʐidʐi tʂi ətɕiʁaŋ gaudasə「私はきみが早くよくなるように希望している」（布和等編　1986：24）：pandʐi「希望する」（＜pan 盼），tʂi 2単主，ətɕiʁaŋ「早く」，gauda「よくなる」（＜hao 好），-sə希望

［Cha.］bii tʃamææg xurdaŋ sææŋ boloosœœ gədʒ xüstʃ bææn「同上」：tʃamææg 2単目，sææŋ「よい」，bol「なる」，-oosœœ 希望，gədʒ「～と」，xüs「希望する」，-tʃ副動詞

［Chi.］我希望你早日快復健康「同上」

(15) sumuladʐi kuŋni xaijinə giədʐi wo「人に危害を加えると思っている」（布和等編同上：97）：sumula「思う」（＜simou 思謀），kuŋ「人」，-ni 対格，xaiji「危害を加える」（＜hai 害），-nə現在，giədʐi「～と」

この(14)(15)の pandʐidʐi，sumuladʐi の -dʐi は，中国語の接尾辞 -zhe（着）に由来するものであることに注意。

### 3．4．語彙

陳はドゥンシャン語（鎖南垻地区）における中国語からの借用語彙が，1955年の調査語彙1593語のうち49.2％，1980年の調査語彙3171語のうち49.76％という高い率を占めていることを報告している（1988：105）(8)。これは近隣の同じくモンゴル語系孤立的諸言語であるシラ・ユグル語（1956年

は23.9％，1980年は9.6％），モンゴル語（1955年は19％，1980年は18.69％），青海省のバオアン語（1956年は14％，1980年は9.04％）[9]における中国語からの借用語の率をはるかに上回っている。また，このような高い率を反映して，ドゥンシャン語における中国語からの借用語彙は，名詞，数詞，数量詞，形容詞，副詞，動詞のみならず，接続詞，繋辞，終助詞といった文法的な機能語にまで及んでおり，その干渉の大きさがうかがわれる。

ハールマンは多量言語接触によって当該言語に生じる文化変容現象の指標として，1）数詞，2）ことば行為構成要素（接続詞，間投詞，慣用句など），3）親族名称，4）身体名称の借用が考えられることを指摘している（1985：87－139）。つまり，多量接触言語と呼ばれるものでは，これらの領域に借用が平均的に見られ，このことが当該民族が文化的な変容をこうむっていることの指標になるという。ドゥンシャン語でも，以下に見るように，これら4つの領域のすべてにわたって中国語からの借用が見られることから，このような語彙借用と平行して，文化的にも単なる移入から，さらに影響の甚大な文化変容が起こっていることが予想されることにも注目しておきたい[10]。

3．4．1．名詞

中国語からの借用語は日常の生活用具，親族名称，身体部位，動植物などの語彙に見られる（布和等編　1983）。

(16) wadzi「靴下」（＜ wazi 襪子）
bəidzi「湯のみ」（＜ beizi 杯子）
agu「父の姉妹」（＜ agu 阿姑）
sundzi「孫」（＜ sunzi 孫子）
ui「胃」（＜ wei 胃）
xaba「あご」（＜ xiaba 下巴）
dʐuadzi「足」（＜ zhuazi 爪子）
loto「ラクダ」（＜ luotuo 駱駝）
jaŋji ～ jaju「じゃがいも」（＜ yangyu 洋芋）

借用語の中には解放以前の早い時期に借用されたものと，解放以後に借用されたものがある。

⑰ ɕiaudʐie「お嬢さま」(< xiaojie 小姐)[解放前]
xuaŋʂaŋ「上帝」(< huangshang 皇上)[ 〃 ]
giəmiŋ「革命」(< geming 革命)[解放後]
ʂəxuidʐuji「社会主義」(< shehui zhuyi 社会主義)[ 〃 ]

中国語を音転写した借用語以外に，複合語には，前項に中国語の借用語，後項にそれをドゥンシャン語で注解した形のものがある(阿・伊布拉黒麦 1988：155)。

⑱ pingo alima「りんご」：pingo (< pingguo 蘋果「りんご」)，alima「果物」
sumu mutun「松の木」：sumu (< song mu 松木)，mutun「木」

また，前項の中国語の借用語が修飾部，後項のドゥンシャン語が被修飾部となる複合名詞がある(阿・伊布拉黒麦 同上)。

⑲ maimai kun「商人」：maimai (< maimai 売買)，kun「人」
niupi giədiə「牛皮紙」：niupi (< niupi 牛皮)，giədiə「紙」

さらに，一部を中国語の借用語で表わし，一部をドゥンシャン語で翻訳した複合名詞がある(阿・伊布拉黒麦 同上：156)。

⑳ naidzi arasun「沸騰した牛乳の薄い膜」：naidzi (< naizi奶子「牛乳」)，arasun「皮」
この例は中国語の「奶皮」の「奶」を naidzi で，「皮」をドゥンシャン語の arasun で表わしたものである。

3．4．2．数詞

数詞は「1」から「10」までが本来のドゥンシャン語で，「11」以上は中国語からの借用語で表わされる(11)(12)。

3．4．3．数量詞(13)

㉑ 度量衡単位：dʐaŋ (< zhang 丈)，tʂi (< chi 尺)，suŋ (< cun 寸)
貨幣単位：kuai (< kuai 块)，dʐiau (< jiao 角)，fəŋ (< fen 分)
類別単位：dʐaŋ「～枚」(< zhang 張)，tɕiau「～本」(< tiao 条)，ʂuaŋ「～対」(< shuang 双)，fu「～幅(絵など)」(< fu 副)

3．4．4．動詞

ドゥンシャン語の動詞には中国語から借用されたものが多いが，ドゥンシャン語固有の動詞同様，語幹に動詞形成接尾辞 -la / -liə/ -lo， -da / -dʐiə/ -do， -ra / -rəなどを付加することによって形成されたものがある。

(22) dafala「派遣する，嫁に行く」(< dafa 打発)
bəiliə「背負う」(< bei 背)
pauda「射撃する」(< pau 砲)
minbərə「理解する」(< minbai 明白)

一方，単音節語の場合には，-dʐi (n あるいはŋ終わりの語根の後)， -ji， -tɕi (母音終わりの語根の後) などを付加したものが多い。

(23) indʐi「印刷する」(< yin 印)
laji「引く」(< la 拉)
matɕi「拭く」(< ma 抹)

近年に借用された複音節からなる動詞は，ドゥンシャン語の動詞 giə「する」とともに用いられる。これは日本語で中国語の借用語にサ変動詞を接続して動詞を作る手法と類似している。

(24) pipiŋ giə「批評する」(< piping 批評)
fadʐan giə「発展する」(< fazhan 発展)

3．4．5．接続詞

(25) xo [並列] (< he 和)， xodʐə [選択] (< huozhe 或者)， jəu [累加] (< you 又)， busuandʐə[累加] (< busuanzhe 不算者)， danʂi [逆接] (< danshi 但是)， jauʂi [仮定] (< yaoshi 要是)， inwəi [理由] (< yinwei 因為)

3．4．6．終助詞

(26) ba [疑問，推量，命令] (< ba 吧)， jə [譲歩] (< ye 也)， ja [強調] (< ya 呀)， ʂa [疑問，推測] (< sha 啥)

## 4．動詞語幹による副動詞形成

以上，ドゥンシャン語に見られる中国語の干渉の事例を，音韻，形態，統語，語彙の各レベルにわたって概観してきた。本節ではこのうち形態的干渉

の一例である３．２．５，すなわち動詞語幹による副動詞形成について取り上げ，中世蒙古語あるいは現代モンゴル語において限られた範囲で見られる類似の用法と対照させながら，これが，種々の動詞＋動詞の結合，さらには動詞が直接結合せず，その間に主格以外の補語や修飾語が挿入された，日本語について寺村のいう「複述語をもつ単文」(1991：217)(14)に類する文，さらには２つ以上の節を含む複文の形成を動詞の形態的変化を経ずに行ないうる中国語の干渉によって，拡大発展したものであることを見てゆく。

モンゴル語は一般に，動詞語幹に種々の副動詞形成接尾辞を接続することによって副動詞形を形成する。しかしその一方で，動詞が語幹だけで副動詞として働く現象も，過去にはすでに中世蒙古語に，また現代では現代モンゴル語（ハルハ方言，チャハル方言等）において見られる。しかしながら，それらは以下で見るように限られた範囲で観察されるにすぎず，ドゥンシャン語に見られるような広範な使用は，中国語の干渉を抜きにしては考えられないものである。さらにこれは，３．２．１で例示したような，中国語の種々の後置成分を，接尾辞型というドゥンシャン語の類型的枠組みのなかで借用するといったいわば量的な変化ではなく，むしろ動詞形態法における接尾辞型そのものの崩れ，さらにいうならば，接尾辞型から孤立語型への質的な変化の方向性を暗示する現象として注目に値いするものである。

### ４．１．中世蒙古語

中世蒙古語文献『元朝秘史』には，動詞が語幹だけで副動詞形を形成している例が数例みられる。『元朝秘史』はモンゴル語を漢字音訳したものであるが，以下では便宜的に，小沢（1984，1985）の施したローマ字転写に若干の訂正を加えて表記するものとする。

(27) söni maɢa qa'aa qono aǰu'uu「夜はさてどこに泊まっていたのだろうか」（§31）：söni「夜」，maɢa「はて」，qa'aa「どこに」，qono「泊まる」，a「いる」，-ǰu'uu 過去

(28) buqa'uu minu abču sulalaǰu qono a'uululaai「私のかせを取り弱めて泊まらせていた」（§84）：buqa'uu「かせ」，minu 1単属，ab「とる」，-ču 副動詞，sulala「弱める」，-'uul 使役，-u- 挿入母音，-laai 過去

(29) Begter hulqun deere širGa aGtatan yesün morid qara ǰu sa'uu büküidür「ベクテルが小山の上で黄白色の去勢馬など9頭の馬を見張ってすわっているときに」(§77)：hulqun「小山」, deere「上で」, širGa「黄白色の」, aGta「去勢馬」, -tan「など」, yesün「9」, mori「馬」, -d複数, qara「見張る」, -ǰu副動詞, sa'uu「すわる」, bü「いる」, -küi形動詞(現在), -dür与格

(30) Bodončar Buqu-qatagi aqayu'aan qoinača daGaǰu qataraǰu yabu ügülerün「ボドンチャルはブク・カダギ兄の後から従い，駆け行きながら言うのに」(§33)：aqa「兄」, -yu'aan再帰格, qoina「後」-ča奪格, daGa「従う」, qataṛa「駆ける」, yabu「行く」, ügüle「言う」, -rün「～したところ」

小沢はこれらの動詞語幹形を文法的には不規則であるとしながらも，中世蒙古語においてすでに，副動詞語尾-nを省略して動詞語幹によって副動詞形を表わす用法が存在していた可能性があることも示唆している(1984：163)。

まず上のqono aǰu'uu, qono a'uululaai, sa'uu büküidür, yabu ügülerünの4例では，qono, sa'uu, yabuという動詞の語幹形がすべて後ろの動詞に直接接続して用いられ，動詞＋動詞の結合を形成していることに注意されたい。さらにこれら語幹形に後続する動詞に注目してみると，(27)(28)(29)の3例は，動作の進行を表わすa，bü[15]「いる，ある」という補助動詞[16]であり，このことから，2つの動詞の結合度が強いことがうかがわれる。ただし，このa，büという補助動詞も規則的に動詞の語幹形に後続するわけではなく，通常は，次のように副動詞形成接尾辞をともなった動詞に後続しているため，上のような動詞語幹形の現われは，『元朝秘史』では例外的な現象と考えるべきものであろう。

(31) niken gürümele kö'üün ge'üü sa'aan aquyi ǰolGaǰu「一人の爽やかなる若者が牝馬を搾乳しているのに出会って」(§90)：niken「1」, gürümele「爽やかな」, kö'üün「若者」, ge'üü「牝馬」, sa'aa「搾乳する」, -n副動詞, -qu形動詞(現在), -yi対格, ǰolG「出会う」

(32) tere Qabiči ba'aaturun ekeyin inǰe iregsenni Bodončar tataǰu büle'ee

「そのカビチ・バートルの母に嫁入り財産として来たものをボドンチャルは妾にしていた」（§43）：tere「その」，-un 属格，eke「母」，-yin 属格，inǰe「嫁入り財産」，ire「来る」，-gsen 完了，-ni 対格，tata「妾にする」，-le'ee 過去

一方，例㉚の yabu ügülerün の ügülerün は本来の意味を保った本動詞として用いられており，yabu，ügüle という2語の意味的な結合度が，補助動詞を後続させた他の3例に比べ弱いことがうかがえる。このことは，中世蒙古語においては次に見る現代モンゴル語よりも広範な動詞語幹形の利用が可能であったことを示唆するものといえるかもしれない。

**4．2．現代モンゴル語**

ハルハ方言では動作の継続を表わす動詞の重複形を作る際に，通常，前部の動詞は副動詞形成接尾辞 -n を取るが，後部の動詞が副動詞形成接尾辞 -saar ～ -soor ～ -seer ～ -söör「～ながら（継続）」を接尾する場合に限って，語幹形のままで現われる。

㉝ jab jabsaar「行き行きしながら」：jab「行く」
gui guiseer「走り走りながら」：gui「走る」

一方，チャハル方言では，後部に補助動詞 jad「～しかねる」がくる場合に限り，前部の動詞は規則的に語幹形で現われる(17)。

㉞ tʃii tʃin bas juu xələx gəəd xel jadaad bææn「おまえはまたなにを言おうとして言いかねているのだ」：tʃii「おまえ」，tʃin 人称所有小辞（2単），bas「また」，juu「なに」，xəl「言う」，-ə- 挿入母音，-x 形動詞（現在），gə「言う」，-əəd 副動詞，-aad 副動詞，bææ「いる」，-n 現在

現代モンゴル語においても，ハルハ方言では動詞の重複形，チャハル方言では動詞と補助動詞というように，『元朝秘史』同様に2動詞の結合の場合に，語幹形が現われていることに注意されたい。しかし，すでに上で触れたように，現代モンゴル語には『元朝秘史』の例㉚に見られるような，動詞の語幹形に後続する動詞が意味的な独立性を保っている例は見られないことから，中世蒙古語よりもさらにその利用範囲が限定され，2つの動詞の結合度が強

い場合にのみ語幹形が現われると考えることが可能であろう。ちなみに，チャハル方言の jad は本来は「疲れる，苦しむ」を意味するが，これが本動詞として単独で用いられることはほとんどなく，通常は上のように補助動詞として他の動詞に後続して用いられるか，あるいは，jadaxgüi「～するかもしれない」（-x 形動詞［現在］，-güi 否定），jadaxdaa「少なくとも」（-d 与格，-aa 再帰格），jadadʒ「せめて」（-dʒ副動詞）のような慣用表現として用いられることから，その語としての独立性の低さがうかがえる。

### 4．3．ドゥンシャン語

一方，ドゥンシャン語では以下に見るように，中世蒙古語や現代モンゴル語に見られるよりもはるかに豊富かつ広範囲に動詞の語幹形が用いられている。

#### 4．3．1．複合動詞

ドゥンシャン語では複合動詞の前項にも語幹形が見られる。以下にあげる例には参考に，引用文献である布和編著（1985），布和等編（1986）で施されている中国語訳を添えておく。

(35) in giəsə ənə kəwoŋ biŋlani maŋ qari ətʂiʁawo「こうすると，この少年は兵士たちをすべて帰した」[干是，小伙子把士兵都打発走了]：in「こう」，giə「する」，kəwoŋ「少年」，biŋ「兵士」（< bing 兵），-la 複数，-ni 対格，maŋ「すべて」，qari「帰る」，ətʂi「行く」，-ʁa 使役

(36) ənə otɕinla niə kuŋ niə kuan tajisə mausuməʁətʂini bau irəʁəwo「この娘たちは一人が一つの足を蹴ると，妖婆を降りて来させた」[姑娘們一人踢了一脚，把妖婆踢了下来]：otɕin「娘」，-la 複数，kuŋ「人」，kuan「足」，taji「蹴る」（< ta 踏），mausuməʁətʂi「妖婆」，bau「降りる」，irə「来る」，-ʁə使役

2 つの動詞の結合が複合動詞か否かの判断はむずかしいが，上例(35)(36)では使役の接尾辞 -ʁa ～ -ʁə が，2 つの動詞全体に接続していると考えられることから，複合動詞と見ることができる。

#### 4．3．2．動詞の重複形

強調を表わす動詞の重複形形成の際，前部動詞は語幹形で現れる。

(37) ənə biəri aji ajidʐi 「この嫁は恐れに恐れて」[這個媳婦害怕]：biəri 「嫁」, aji 「恐れる」

動詞の重複形の場合，語幹形が2つ重なることがある。

(38) dʐaŋGəi xolu xolu hətʂədʐi badzila dawo 「オオカミは走りに走って疲れて我慢できなくなった」[狼跑着，跑着，累得忍不住了]：dʐaŋGəi 「オオカミ」, xolu 「走る」, hətʂe 「疲れる」, badzila 「我慢する」, da 「できない」

(39) dʐau dʐau ənə niənəigiəni dʐau alawo 「咬みに咬んでこの老婆を咬み殺してしまった」[咬着，咬着，把老奶奶咬死了]：dʐau 「咬む」, niənəigiə 「老婆」

4．3．3．動詞＋補助動詞

ドゥンシャン語では，次のようなさまざまな補助動詞が主動詞の語幹形に接続しうる。

agi 「取る」：動作の完了

(40) sauxuni dʐaŋGəi idʐie agiwo 「種ヤギをオオカミは食べてしまった」[狼把種山羊吃掉了]：sauxu 「種ヤギ」

(41) noʁəi banbəŋni kiəliənni tʂuʁu agiwo 「雀バチの舌をすっかりつついてしまった」[就把黄蜂的舌頭啄了下来]：noʁəi banbəŋ 「雀バチ」, -ni 属格[18], kiəliən 「舌」, -ni 対格, tʂuʁu 「つつく」

etʂi 「行く」：動作が対象の広範囲に及び，その結果なにかが失われること

(42) mini arasuŋni maŋ tʂoji ətʂiwo 「私の皮を全部剝ぎ取ってしまった」[却把我的皮子全部給剝去了]：maŋ 「全部」, tʂoji 「剝ぐ」

補助動詞として用いられているこのətʂiと平行して，中国語訳でも本来「行く」という意味を表わす「去」という方向補語が使われていることに注目されたい。ちなみに方向補語「去」は，「動詞＋『去』＋名詞（動作の対象）」という形で，例えば「已経用去了一億美元（すでに1億ドルもつぎ込んだ）」のように，やはりətʂiと同様の意味を表わす。

bai 「いる」：動作の進行

(43) 'basi jama Guiluʁa dadənə udʐə baiwo「トラはなにも変えることもできずに見ていた」[老虎無可奈何地干瞪着眼站在那里]：'basi「トラ」, jama「なにも」, Guilu「変わる」, -ʁa 使役, da「しかねる」, -dənə副動詞, udʐe「見る」

da「～しかねる」：動作の不可能性（＝ Cha. jad）

(44) giəduŋ tʂa olusanni bi dʐila danə「何時間になったのか私は覚えていない」[我記不得有多久了]：giəduŋ「いくつ」, tʂa「時間」, olu「なる」, -san 完了, -ni 対格, dʐila「記憶する」（< ji 記）

(45) mini ənə dʐuʁədə otudʐi badzila dadʐi wo「私のこの心が痛んで我慢できない」[我心痛得忍受不了]：dʐuʁə「心」, -də与格, otu「痛む」

ʂida「できる」：動作の可能性

(46) tʂi əridʐi olu ʂidanə「君は捜して見つけることができる」[你能找到的]：əri「捜す」, olu「見つける」

kaiji「始める」（< kai 開）：動作の開始

(47) loto lugəni tʂudʐiəʁəsənu pəsə tuŋkuliədʐi kiəliə kaijiwo「ラクダはシカを見ると，また鳴いて言い出した」[駱駝看見鹿，又吹起牛来了]：loto「ラクダ」, lugə「シカ」, tʂudʐiəʁə「見る」, -sənu 副動詞, pəsə「また」, tuŋkuliə「鳴く」, kiəliə「言う」

tɕiji「始める」（< qi 起）：動作の開始

(48) dʐuadziGala dzəmiŋni waji tɕijiwo「足で地面を掘り始めた」[用爪子搔着地]：dʐuadzi「足」, -Gala 造格, dzəmiŋ「地面」, waji「掘る」（< wa 挖）

(49) noʁəi banbəŋ otudʐi fugiədə oŋGono tɕijiwo「雀バチは痛くて大声で叫び始めた」[黄蜂痛得大声叫起来]：fugiə「大きい」, -də与格, oŋGono「叫ぶ」

4．3．4．意味的独立性を有する2動詞の結合

(50) əʁi alasə idʐiəku uliə olunə「打ち殺したら食べられない」[不能吃被打死之物]：əʁi「打つ」, ala「殺す」, idʐiə「食べる」, -ku 形動詞（現在）, uliə否定（現在）, olu「できる」（許可）, -nə現在

(51) xolu hətʂəsə ja, niə funiəʁaŋ otʂirawo「走り疲れると，一匹のキツネに出くわした」[跑得已経疲乏的時候，踫見一只狐狸]，xolu「走る」，hətʂə「疲れる」，ja 終助詞（強調），niə「1」，funiəʁaŋ「キツネ」，otʂira「出会う」

4．3．5．多動詞結合

多動詞の結合の際，語幹形はときには2つあるいは3つ連続して現われることがある。

(52) madʐuŋliŋ dʐiauli bosi irəsə doluaŋ kuŋ udurudʐi wo「馬仲英が跳び起きてくると，7人の人を引き連れていた」[馬仲英発動起義時，帯領七個人]：dʐiauli「跳ぶ」，bosi「起きる」，irə「来る」，doluaŋ「7」，kuŋ「人」，uduru「引き連れる」

(53) bi xolu anda irəwo「私は走り逃げてきた」[我是逃脱而来的]：anda「脱する」

(54) taŋwaŋ liʂimiŋ ənə kuŋni tʂudʐiəʁədənə dʐinda dʐiauli bosi irəwo「唐の王李世民はこの人を見て，慌てて跳び起きてきた」[唐王李世民看見這個人赶忙站了起来]

(55) bi aji xolu hətʂə buɕindadʐi wo「私は恐れ走り疲れて力尽きた」[把我嚇得跑累了，精疲力尽了]：buɕinda「力尽きる」

4．3．6．複述語をもつ単文

動詞の語幹形は，動詞間に補語（主格を除く）や修飾語を含む場合にも，その前部の動詞に現われる。

[a] 並列構成

(56) dʐaŋGəisə uliə aji Guʁisə uliə ajidənə “go ləuləu” ʂi jaŋ odʐiən wo ʂa「オオカミも恐れず，賊も恐れず，『鍋漏漏』というのはいったいどんなものなのだ」[不怕狼，不怕賊，而這“鍋漏漏”是個啥東西呢]：Guʁi「賊」，-dənə副動詞，jaŋ「どのような」，odʐiən「物」(< wujian 物件)，ʂa 終助詞（疑問）

(57) tʂini jama uliə giə, tʂini tʂauni dojilə uliə irənə「おまえをなにもしないし，おまえの政権を奪いにも来ない」[他不做什麼干涉你的事]：

tʂini 2単目，jama「なにも」，tʂini 2単属，tʂau「政権」(< chao 朝)，-ni 対格，doji「奪う」(< duo 奪)，-lə副動詞（目的）

[b] 従属構成

(58) əʁi ala dʐiu mausumaʁət ʂini giədədu duŋɕilani maŋ uʁudənə「打ち殺すとすぐに妖婆の家にあるものをすべてもって」[打死之后，带着妖婆家里的所有東西]：dʐiu「～するとすぐに」(< jiu 就)，mausumaʁ-ətʂi「妖婆」，-ni 属格，giə「家」，-də与格，-du「～にある」，duŋɕi「物」(< dongxi 東西)，-la 複数，-ni 対格，uʁu「もつ」

4．3．7．複文

さらに，2つ以上の節を含む複文の，前節の動詞も語幹形で現れることができる。

(59) tʂi uila uliə uila ma ənə fuguŋ ʂi minuʁuŋ wo「君が泣こうが泣くまいが，この脂肪の塊は私のものだ」[不管你哭不哭，這塊脂油是我的]：uila「泣く」，ma 終助詞（逆接），fuguŋ「脂肪」，minuʁuŋ「私のもの」

## 4．4．中国語との対照

中国語は語が形態的変化をこうむることなく，語順や機能語によって文法関係を標示することが可能なことから，一般に「孤立語」と呼ばれている。もっとも現代中国語では，重複法，複合法，そしてその捉え方，扱い方は研究者によって異なるもの[19]，接辞法なども形態的手段として用いられている。ちなみに，動詞には，相にかかわる -le（了）[完了]，-zhe（着）[進行]，-guo（過）[不定過去]，-qilai（起来）[起動]，-xiaqu（下去）[継続]などの接尾辞が生産的に接続しうる。ただし，これらは義務的なマーカーではなく，文脈によっては省略されうるものでもある（例：這是去年完成［了］的房子「これは去年完成した家です」[Chao 1968：246]）。さらに複合，重複，連語，複述語をもつ単文，複文という語から文にわたるあらゆるレベルで，前部の動詞は語幹形のまま現われることが可能である。

4．4．1．複合動詞

2つ以上の動詞語幹を組み合わせた複合動詞[20]としては，動作・行為と

その結果を表わすもの（shuoming 説明「説明する」，dadao 打倒「打倒する」など），動作・行為の順序を表わすもの（jieyong 借用「借用する」など），類義語複合（shangliang 商量「相談する」，libie 離別「別れる」など），反義語複合（laiwang 来往「行き来する」，huxi 呼吸「呼吸する」など）などがあげられる（興水　同上：52－4）。

4．4．2．動詞の重複形

中国語における動詞語幹の重複形は一般に時間の短いこと，あるいは動作の回数の少ないことなど，少量であることを示す（興水　1985：170）。この点，ドゥンシャン語の(37)(38)(39)のような強調表現としての重複形とは異なることに注意されたい。次の(60)は興水（同上：172－3）による。

(60) 他不好意思地笑笑「彼はきまり悪そうにちょっと笑った」
　　给我看看「私にちょっと見せて下さい」

4．4．3．動詞＋結果補語・方向補語

中国語ではある動詞が別の動詞に直接に後置され，いわゆる「結果補語」「方向補語」として，動作・行為の結果あるいは方向性を示すことがある。結果補語としては，si（死）「死ぬ」（dasi 打死「打ち殺す」[例50の中国語訳参照]など），luan（乱）「乱す」（daoluan 搗乱「かき乱す」など），lei（累）「疲れる」（paolei（跑累）「走り疲れる」[例55の中国語訳参照]など）などがある。また方向補語としては，lai（来）（他から話者へ），qu（去）（話者から他へ），chu（出）（内から外へ），jin（進）（外から内へ），shang（上）（下から上へ），xia（下）（上から下へ），hui（回）（回帰），guo（過）（通過）などがある。次の(61)は方向補語の例（興水　同上：379）。

(61) 一只蜻蜓飛来了「一匹のトンボが飛んで来た」
　　雄鷹飛上了藍天「タカが青空に飛び上がった」

結果補語や方向補語は，このように本来の意味を保って用いられる場合以外にも，本来の意味が希薄になり，前の動詞に付属的な意味を添える働きをすることもある。次の(62)は結果補語の例。

(62) 我説的話你听見了嗎？「私の言ったことが君には聞こえたか」（見［五感による感取］）

捉住了一只胡蝶「一匹のチョウを捕まえた」(住 [安定])

事情做完了「用事を済ませた」(完 [完了])

次の(63)は方向補語の例 (興水　同上)。

(63) 這個人看来年紀不小了「その人は見たところかなりの年齢である」(来 [推量的結論を出す過程])

我們都買上了「私たちはみな買えた」(上 [対象への到達あるいは目的の達成・実現])

この他，例(42)で見た結果補語「去」も，動作・行為が広範囲に及び，その結果なにかが失われるという，「去」が本来示す「行く」という意味とは異なる派生的な意味を表わしていることに注意されたい。

中国語の結果補語や方向補語に見られる，このような本来の独立した意味から前部の動詞に対する付属的な意味への変異は，ドゥンシャン語の前部動詞に語幹形が現われる2動詞の結合において，後続する動詞が独立した意味を示す場合も，補助動詞としての意味を表わす場合もあることと平行しているように思われる。

4．4．4．多動詞結合

「来」「去」という2つの方向補語は，それ以外の方向補語に後続して，「進来」「回来」「出去」「過去」などの複合方向補語を形成して動詞に後置されるが，このことはドゥンシャン語において2つあるいは3つの動詞語幹が連続して現われる現象とも無関係ではないであろう。ちなみに，例(52)(53)(54)では，いずれも連続した最後の動詞がirə「来る」であることに注目されたい。

4．4．5．複述語をもつ単文

[a] 並列構成

(64) 天天跑歩，遊泳，打網球 (興水　同上：409)「毎日ジョギングをしたり，泳いだり，テニスをしたりする」

[b] 従属構成

(65) 花両小時買東西 (興水　同上：418)「2時間かけて買物をする」

4．4．6．複文

(66) 你這麼説，我還是不去 (橋本　1989：901)「君はそう言っても，私は

やはり行く気がしない」

このように中国語では，語から文にわたるあらゆるレベルで，動詞は形態的変化をこうむることなく現われることが可能である。

以上，中世蒙古語，現代モンゴル語，ドゥンシャン語，中国語における動詞語幹形の現われをまとめて図示すると次のようになる。

〈図 2〉

| | 中世蒙古語 | 現代モンゴル語 ハルハ | 現代モンゴル語 チャハル | ドゥンシャン語 | 中国語 |
|---|---|---|---|---|---|
| 複合動詞 | | | | ○ | ○ |
| 重複 | | ○ | | ○ | ○ |
| 動詞＋補助動詞 | ○ | | ○ | ○ | ○ |
| 動詞＋動詞 | ○ | | | ○ | ○ |
| 複述語をもつ単文 | | | | ○ | ○ |
| 複文 | | | | ○ | ○ |

ドゥンシャン語では中世蒙古語や現代モンゴル語に見られない動詞の語幹形として，一方では複合による語形成へ，もう一方では動詞が直接結合しない複述語をもつ単文あるいは複文形成へと，いわば両方向的にその利用範囲を広げており，そのいずれの利用においても中国語との重なりを見せている。このことから，ドゥンシャン語における動詞語幹形の広範な利用が，中国語との接触に触発されて，既存の利用範囲を拡大発展させた結果に他ならないことがうかがわれる。

## 5．おわりに

以上，モンゴル語系の孤立的諸言語のひとつであるドゥンシャン語における中国語からの干渉による変容について，その背景となったドゥンシャン族の言語使用状況，および音韻，形態，統語，語彙の各レベルに見られる変容の事実を概観的に踏まえながら，特にその動詞形態法に注目して考察をおこなった。ドンシャン語の動詞形態法に見られる接尾辞型から孤立語型への移

行は，モンゴル語の基本構造にかかわる重要な質的変化ととらえることができるものである(21)。これはまた部分的ではあるにせよ，ドゥンシャン語におけるアルタイ諸語的特徴の喪失，裏返せば，中国語の類型的特徴への収斂を示すものであるといえよう。

もとより言語接触による影響が，威信言語から非威信言語へという一方向的なものではなく，両方向的ないわば「共鳴」しあうものであるという細川の指摘（1985）は，ここで具体的に扱うだけの資料はないが，ドゥンシャン族の言語状況についてもあてはまるものにちがいない。ちなみに例を近隣に取れば，青海省でおこなわれている中国語口語には，同じくモンゴル語系の孤立的言語であるモングォル語などのアルタイ諸語からこうむった影響として，格語尾の借用による格範疇の出現，SOV 型への語順の変化などが報告されている（賈　1991：5－12)。このことはさらに，現代中国語（北方語）そのものが北方のアルタイ諸語からのさまざまな類型構造上の影響を受けながら形成されてきたものであるとする，橋本（1992：1089）などの示唆に富んだ議論にも連なっていくものとして注目されるべきものであろう。

**註**

(1) これら孤立的諸言語に見られる古い言語特徴としては，中世蒙古語の無声摩擦喉音 h に対して，これらの言語ではなんらかの無声摩擦子音が保存されていること，また，やはり中世蒙古語に見られる古い語彙が保存されていること（例えばドゥンシャン語の abi「伯父」＜ ebin 額賓［元朝秘史］，bəŋgə「蚤」＜ burge 不児格［華夷訳語］など）などがあげられる。

(2) 栗林のいう「2言語併用」というのは，劉（1965：153）などに依拠したものかと思われる。ちなみに中国少数民族双語教学研究会編（1990：1）では，少数民族を多数かかえる中国の事情を反映して，「ある個人あるいはある言語集団が2種類の言語を使用する現象を『双語現象 bilingualism』とよぶ」と，特に2言語使用を個人の運用能力としてとらえず，むしろ後者の場合，すなわち集団的2言語使用としてとらえ定義していることがうかがわれる。

(3) 一方，《東郷族自治県概況》編写組編の新しい資料によれば，ドゥンシャン族の全人口の約2分の1，すなわち13万7442人がドゥンシャン族自治県に居住しているとのことである（1986：13)。

(4) 細川はある言語特徴によって接触下の両言語の構造が部分的にであれ，全面的に

であれ，双方が歩み寄る形で類似してくるという点に着目して，「干渉 interference」ではなく「共鳴効果 resonance」という概念を採用している。筆者はドゥンシャン族地域における中国語の状況については現在のところ資料未見のため，本稿ではさしあたり従来の概念「干渉」を用いておくことにする。

(5) ドゥンシャン語の音素目録は以下のとおりである。

母音 i ə a o u ɤ

子音 p t k q ; b d g ɢ ; f s x h ; w j ʁ ; l r ;
m n ŋ ; ɕ tɕ dʑ ; ʂ tʂ dʐ ; ( z ts dz )

これらの子音のうち，p t k q tɕ tʂ ( ts ) は無声帯気音，b d g ɢ dʑ dʐ ( dz ) は無声無気音である。

(6) 橋本 (1978：99) は類別詞と数量詞を区別し，前者は，多くは単音節からなるため同音語が多い名詞に付加されて，一定の余剰性をもたせることによって同音語の区別を容易にするものであり，したがって，例えば，「一条路」のように数詞とともに現われるのみならず，「這条路」のように指示詞とも現われることが可能であるのに対し，後者はあくまでも数量の単位を表わすものであるため，指示詞と現われることはないとしている。本稿であげる中国語からの借用語のなかにも，中国語では橋本のいう「類別詞」としても機能するものが多いが，ドゥンシャン語では筆者の見る限り，その中には指示詞とともに現われるものはないため，これらを数量詞として借用したものと考え，以下，「数量詞」という用語を統一的に用いることにする。

(7) 中国語口語では受動構文を作る際，使役マーカーである jiao (叫) や rang (譲) が受動マーカーとして拡大使用されるが，橋本 (1989：901) はこの現象を満州語，シベ語，モンゴル語といった北方アルタイ諸言語の影響によるものと考えているようである。

(8) ちなみに，ドゥンシャン語の中国語以外の言語からの借用語の割合は，同じく陳 (1988：105) によれば，1980年時点で，チベット語からは0.03%，チュルク系の言語からは1.29%である。

(9) 一方，青海省のバオアン語では，チベット語からの借用語が1980年には53.62%と，バオアン語の語彙全体の半数を上回る高い率を占めていることも見逃すことができない。

(10) ちなみに，ハールマンは言語接触の過程を文化レベルと対照させて次のように図式化している (1985：86)。

言語レベル：言語接触 → 多量言語接触 → 言語取り替え

文化レベル：文化移入 → 文化変容 → 同化

(11) 「11」以上の数詞を，例えば* saŋʂi dʐiʁoŋ「36」( saŋʂi「30」[< sanshi 三十]，

dʐiʁoŋ「6」）のように，中国語の借用語とドゥンシャン語固有の数詞とを複合させて作ることはできない。

(12) ただし，分数詞は一般に中国語の借用語を用いる。sanfəŋdʐi ji「3分の1」（<三分之一），ufəŋdʐi san「5分の3」（<五分之三）

(13) 「1」から「10」までの数詞がいくつかの数量詞と結合する際に起こる語幹の交替については，栗林（1989：1285）を参照のこと。

(14) 寺村は動詞に補語や修飾語がついてもガ格（主格）が現われなければ，ある具体的，個別的な叙述内容，すなわちコトにはならないとして，2つの主格補語にそれぞれ述語がついたコトが結合したもののみを「複文」と呼び，主格が1つしか現われずに2つの述語が現われる場合を「複述語をもつ単文」として，複文とは区別している（1991：216－7）。

(15) a，bü の意義素の違いについて，小沢（Ozawa 1979）は後ろに接続する語尾の違いに注目して，aは「ある事物が，ある文脈で，（話し手，聞き手，第3者を含む）話の核の主観（あるいは認識）とはなんのかかわりもなく存在する，すなわち客観的な存在」を表わし，bü は「ある事物がある文脈で話の核の主観（あるいは認識）となんらかのかかわりをもって存在する，すなわち主観的な存在」【訳は一ノ瀬】を表わすと定義している。また，チンゲルテイ（清格爾泰 1981：41）は，現代蒙古文語に若干の活用形として残っているこのa，bü という二つの補助動詞の意義素の違いを，やはりそれぞれ「客観的」陳述と「主観的」陳述の違いであるとしており，これがモングォル語におけるa～va，iという助動詞の意義素の違いとも平行していることを指摘している。

(16) ここでは，単独で本動詞としても用いられる一方で，動詞に後続してこれにある付属的な意味を付加する役割をも果たすものとして，「補助動詞」という用語を用い，いわゆる日本語文法の「助動詞」とは区別する。ちなみに，a，bü は現代の蒙古文語では単独で本動詞として用いられることはないが，『元朝秘史』では次のように述語としても用いられている。

Bodončar uruɢa ese to'aaɢdaǰu ende atala ya'uun ke'eeǰü「ボドンチャルは親族に数えられないで，『ここにいても何になろう』と言って－」（§24）：uruɢ「親族」，-a 与格，ese 否定，to'aa「数える」，-ɢda 受動態，ende「ここに」，tala 副動詞，ya'uun「なに」，ke'ee「言う」

Urši'uun mürenne bükün Ayiri'uud Buiru'uud Tatar irgenne Ambaɢai qahan ökin ögčü「ウルシウン河のほとりにいるアイリウド，ブイルウドのタタールの民にアムバガイ・カアンは娘を与えー」（§53）：müren「河」，-ne 与格，bü「いる」，-kün 形動詞形成（複数現在），irgen「民」，ökin「娘」，ög「与える」

(17) 一方『元朝秘史』では，同じ補助動詞 yada が後続しても，前部の動詞は副動詞形成接尾辞 -n をともなって現われる。

bi ene üge inu uqan yadaǰu「私は彼のこのことばを理解しかねて」(§118) : bi「私」, ene「この」, üge「ことば」, inu 3単属, uqa「理解する」

(18) ドゥンシャン語では対格と属格が同形式 -ni によって標示される。この現象はドゥンシャン語以外のシラ・ユグル語, モングォル語, バオアン語さらにはダグル語といった孤立的諸言語にも同様に見られる。これを対格と属格が融合したとする見方(例えば栗林 1989a : 284), 反対に古い特徴を保存しているとする見方(例えば哈斯巴特爾 1982)があり, 見解の分かれるところである。

(19) ここでは Chao (1968) に従い,「接尾辞 suffix」「接頭辞 prefix」として扱うことにする。

(20) 興水は動作とその結果を表わす複合動詞と, 動詞と補語の組み合せによる連語との違いを, 前者は動詞間に可能・不可能を表わす「得」「不」を挿入することができず, 後者はできることにあると見ている (1985 : 52)。

(21) 一方, 日本語でも中国語などの外来語を借用して形成されたサ変動詞が, ときに語幹のみで補語や修飾語をはさんで分析的に用いられ,「無活用動詞」(松下 1924) と呼ばれているのは興味深い。

## 参考文献


阿・伊布拉黒麦 (1988) :「東郷語的構詞法」甘粛省民族事務委員会少語辦・西北民族学院西北民族研究所編『東郷語論集』(甘粛民族出版社, 蘭州), 138－56

布和等編 (1983) :『東郷語詞匯』(蒙古語族語言方言研究叢書008) (内蒙古出版社, 呼和浩特)

――――― (1986) :『東郷語話語材料』(蒙古語族語言方言研究叢書009) (内蒙古出版社)

布和編著 (1985) :『東郷語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書007) (内蒙古出版社)

Chao, Yuen Ren (1968) : A Grammar of Spoken Chinese (University of California Press, Berkley/Los Angeles/London)

陳乃雄 (1988) :「蒙古語族語源的詞匯」『内蒙古大学学報 (哲学社会科学)』1 (内蒙古大学, 呼和浩特), 105－16

Čenggeltei (1981) : "Mongγur kelen-deki qoyar tusalaqu üile üge-yin tuqai",『内蒙古大学学報 (哲学社会科学) (蒙文版)』2 (内蒙古大学), 35－42

《東郷族自治県概況》編写組編 (1986) :『東郷族自治県概況』(中国少数民族自治地方概況叢書) (甘粛民族出版社)

甘粛省編輯組編 (1987) :『裕固族・東郷族・保安族社会歴史調査』(甘粛民族出版社)

甘粛省民族事務委員会少語辦・西北民族学院西北研究所編 (1988) :『東郷語論集』(甘粛民族出版社)

ハールマン・ハラルト（1985）：早稲田みか編訳『言語生態学』（大修館書店）
橋本萬太郎（1978）：『言語類型地理論』（弘文堂）
————（1989）：「中国語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典第2巻』（三省堂），892－906
細川弘明（1985）：「言語接触と共鳴効果」『人文學報』58（京都大學人文學研究所），59－114
一ノ瀬恵（1992）：「環北太平洋諸言語の形態法のタイポロジー」『月刊　言語』21(8)（大修館書店），82－6
賈晞儒（1991）：「青海漢話与少数民族語言」『民族語文』71（中国社会科学院民族研究所，北京），5－12
角道正佳（1982）：「ドゥンシャン方言の音韻変化」『大阪外國語大學學報　言語編』59，17－35
栗林均編（1986）：『「東郷語詞匯」蒙古文語索引』（東京外国語大学）
栗林均（1989 a）：「モンゴル語族と近隣の諸言語との言語接触 —— 中国青海省、甘粛省の「孤立的」モンゴル系諸言語を中心に ——」北方言語・文化研究会編『民族接触　北の視点から』（六興出版），273－89
————（1989 b）：「東郷語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典第2巻』（三省堂），1281－8
興水優（1985）：『中国語の語法の話 —— 中国語文法概論 ——』（中国語研究学習双書8）（光生館）
劉照雄（1965）：「東郷語概況」『中国語文』2（中国語文雑誌社，北京），153－67
————編著（1981）：『東郷語簡志』（中国少数民族語言簡志叢書）（民族出版社，北京）
松下大三郎（1924）：『標準日本文法』（紀元社）
西江雅之（1984）：「多言語社会の言語，多民族社会の言語」和田祐一・崎山理編『現代の人類学　言語人類学』2（現代のエスプリ別冊）（至文堂），206－18
小沢重男（1979）："Auxiliary verb a- and bü- in Middle Mongolian —— A study on the difference between their sememes ——"，『中世蒙古語の諸形態の研究』（開明書院）
————（1984）：『元朝秘史全釈（上）』（風間書房）
————（1985）：『元朝秘史全釈（中）』（風間書房）
ラムゼイ・S．R．（1990）：高田時雄他訳『中国の諸言語－歴史と現状』（大修館書店）
孫竹（1985）：「東郷語実詞及其形態」『蒙古語文集』（青海人民出版社，西寧），626－49
寺村秀夫（1991）：『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』（くろしお出版）
哈斯巴特爾（1982）：「関於蒙古語族諸語言格的範疇」『内蒙古大学学報（哲学社会科

学)(蒙文版)』3(内蒙古大学)
中国少数民族双語教学研究会編(1990):『中国少数民族双語研究論集』(民族出版社)